
平和を願う、ただそれだけ.....

露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平和を願う、ただそれだけ……

【Nコード】

N3608U

【作者名】

露

【あらすじ】

ある場所に存在する、私立タムシ大学附属第一高校に入学した朝日水凧。彼女は明るい性格ではあるが何か過去において隠し事があり、それを明かそうとはしなかった。自分と似たような感じの先輩の勧めによって彼と同じ生徒会執行部に入部する。彼女はそんな中で楽しく、そして過去を忘れようと決心する。彼女は生徒会として、執行部としての自覚を持ち、高校生活を楽しく過ごそうとしていた……。

連載停止しました。誠に申し訳ございません。

今日からこの学校の一員なのです！（前書き）

このお話は基本的に一人称視点です。

そして、かなり不定期更新になると思われます。

今日からこの学校の一員なのです！

「ふう……………」

入学式というものが終わって体育館の中で溜め息をつく私。そう、私、朝日水凧あさひみなは今日からこの学校、私立タムムシ大学附属第一高校の一員になったのです！何か私が入れるなんて夢のようなどころだつたけれども、これから頑張っていきたいな、と思っっています。

入学式というのは失礼ですが、殆ど寝てました。先生達の話が長すぎてあまり聞く気になれなかつたのです。だからどんな話をしていたかなんて覚えてません！

入学式が終わったら私達はすぐに教室に移動した。床や壁、至るところが全て綺麗だ。そういえば、この校舎って新しく建設されたんだっけ？じゃあ、整備が行き届いているのも頷けるな、うん！

そしてこの学校、なんといっても全寮制！そしてその寮も綺麗で、広がったです！

私達生徒はみんな教室に入るとすぐに自分の席を確認して各自座る。その後、担任の先生である若い女性の先生が話をするが、正直なところ、私は殆ど聞き流した。それよりも、これからの学校生活というものを考えていた。

これから三年間、この学校で生活をする。希望もあるが、不安のほうが多い。でも、頑張っていきたい、と私は思う！

暫くして、先生の話が終わって解散となった。他のみんなは色々な生徒と話したり、メアドを交換したりしているが、私はボールに入れている二体のポケモンを出した。

「これから頑張っていこうね！ ヒコザル！！ ピカチュウ！！」

私がそう言うと彼等は元気よく返事した。そして、ポケモン達をボールに戻すと私は教室を出た。

これから先、一体どういったことが待ち受けているのだろうか、と私は悩む。でも、それでも関係ない！ だって、私は私なりに楽しんで生活するだけなんだ！！

もう、私の高校生活は始まっているんだから……………。

自己紹介！好きなことは……………（前書き）

水凧「ちよつと作者〜！！！」

わっ！？いきなり大声出さないで！！

水凧「これが出さずにいられるかあ！このお話、全然進んでないじゃん！！！」

仕方ないだろ？こっちは試験があつたんだし。

水凧「ぐう……………」

というわけで

水凧「第二話、なのかな？どうぞー！」

自己紹介！好きなことは……

次の日、私は早くに学校に行ってしまい教室にいた。理由は、自室にいてもやることなんてなかったから。だからと言って、教室の中には朝早くから誰かがいる、というわけでもなく、今は私一人なのです。

「…暇だ」

他に誰もいないところで私は机に伏せて呟いてしまった。とか思っていたら、突然ドアが開いて女子生徒が2人入ってきた。彼女達は私を見つけるといきなり近寄って……て、え？

「あ、水風ちゃんだ！」

「うわぁ……。昨日見た通り背が高いね！」

「それに、足も長いし細いし綺麗だね！それにスタイルもすごくいいよねー！」

「それにすごく可愛いし………何だか羨ましいなあ」

「……………」

な、なんなの、この人達は？私を見るなりいきなり近づいてきて何か色々言っ……。それに、私の体を勝手に触っ……。

「あなた達はいつたいなんなの？人を見つけては勝手にベタベタ触ってキヤーキヤー騒いで……………」

私は少しドスのきいた声で二人に言い放った。いや、流石にこれはマズいでしょ…。

「あ、ごめんなさい」

「でも、水風ちゃんが昨日そくさと帰っちゃうし、それにさっきの……………」

あ、まあたお世辞タイムが始まった。そんなこと言っても私は喜びませんよ？

「ハイハイ、お世辞をありがとう。でも、そんなこと言っても何も出ないわよ？」

「いや、そんなつもりは…。それにそんなこと言っていると嫌われるよ？」

んなこと……………分かってるわよ。

「ハイハイ。初対面でそんなこと言ってるの！」

そうやって止めに入ったのはもう一人のほうだった。

「あ、アタシは流藤舞^{みつとうまい}。これからよろしくね！」

そう言って自己紹介するのは先程止めに入ったほう。身長はだいたい160cmくらいでポニーテールを少し色白の肌のスレンダー、て感じの女子。なんだか少し大人しめ、というかんじね。

「あたしは水城志保^{みずきしほ}。よろしく」

もう一人のほうもつられるように言う。こっちは155cmくらいでショートカットの小麦色の肌をしている。如何にも活発運動系のこ、というかんじがするね。

「私は朝日水尻。これからよろしくお願いします。」

私はそう言つと頭を下げた。

「あ、うん。これからよろしくね！ それにしてもあなた、意外と丁寧なのね？」

「それに、やっと笑ってくれたね！」

あら。私、結構固い表情をしてたのね？

「ねえねえ、部活は決めた？」

「えっ!?!」

「こら、志保。急かさないの!」

ありがとう、舞。実はそのことは私はまだ決めてなかったんです！でも、確かにどうしよう？

そんなこんなで朝のHRが始まるまで私達は話し続けていた。

* * *

今日行われたのは自己紹介や今後の予定の書かれた紙の配布。実際、すぐに終わってしまった。どうやら、授業は来週かららしい。この後は各自で部活に仮入部に行く時間なんだけど、二人は先にどっか行ってしまい、仕方なく一人で廊下を歩いていたら同じクラスだ、とかいう男子生徒に捕まってしまった。バトルの誘いらしいけど、私は却下した。のにも関わらず、その彼は私の腕を無理やり引つ張って広い校庭の一部にあるバトルフィールドにまで連れてこられてしまった。私はそれに溜め息をついてしまった。名前はうん、聞いてない。

その彼とは今、対峙する形になっている。

「あの、あなたの……………」

「バトル好きだと言うその実力、見せてもらおうぜ！」

いや、確かにさっきの自己紹介の時にポケモンやバトルは好きだ、って言ったよ！ 言ったけどでもそれが強い、というわけではないからね！ 私、自分で言うのもあれだけど、非常に弱いからね！！

「あの、私の話を……………」

「いけえ、オレのポケモン！」

あつ、また私の話を全く聞く気なしで自分のやりたいことをやるのね。そういうのは好きだけど、そして私が言うのもあれだけど、ちゃんと話を聞いてよ！！

「はあ〜。いくよ、ヒコザル！」

私はボールを投げてヒコザルを出した。ヒコザルは元気いっぱいね。
相手は………え、こそ？

自己紹介！好きなことは………（後書き）

次回、バトルです！

初バトル！ VS ミジユマル そして部活の勧誘！（前書き）

初バトルなのはいいけど、いきなり不利なタイプと当たっちゃった。
頑張っつて、ヒコザル！

初バトル！ VS ミジュマル そして部活の勧誘！

私が出したのは炎タイプのヒコザル。そして相手が出したのは水タイプのミジュマル。うん、どう考えても私達が不利。それに私のポケモンは弱いからマズい。でも、頑張るしかない！

「頑張ろう！ ヒコザル！」

そう言うと彼はこっちを振り返って力強く返事して頷く。うん、頑張れ！

「行け、水鉄砲！」

相手から動いてきちゃった。ミジュマルが口からその名の通り水を発射する。これが当たったらヒコザルには効果抜群じゃない！

「ヒコザル、かわして！」

ヒコザルは私の指示通りにかわす。取り敢えず一安心。

「引っ掻くよ！」

ヒコザルは素早くミジュマルに近づいて引っ掻いた。よし！ まずは先制でダメージを与えられた！

「逃がすな！ 水鉄砲！」

とか油断してたら今度は超至近距離からの水鉄砲をヒコザルは受け

ちゃった。て、マズい！

「し、しまった！！」

「今だ！ シエルブレード！！」

ミジュマルは起き上がるうとして、ヒコザルに近づいておなかに付いてるホタチを手にとってそこから水の剣を作って叩きつけた。そしてヒコザルは悲鳴をあげた。

「あちゃ〜……」

私は思わず右手を顔に被せた。見なくても分かる。彼は戦闘不能だ。

「ごめんね、ヒコザル……」

私はそう言ってヒコザルをボールに戻し、その場に座り込んだ。ハア、弱いなあホント。

「なあなあ、そのエーフィもお前のポケモンなのか？」

え、エーフィ？ そんなこ、私は持っていないと思えば右を向く。そこにはお座りをして尻尾を横に振っている可愛らしいエーフィがいた。頭を撫でてあげようと手を出そうとしたらそのこは誰かに持ち上げられた。

「こらエーフィ！ 勝手にどっかに行くな、っていつも言ってるだろ？」

男子生徒、と思われる人に叱られているエーフィ。え、何で思われ

るか、って？ だって、顔立ちが端正だけど女の子っぽいんだもん。それに、声も少し高めだし。

「そのエーフィはお前のか！ 俺とバトルしねえか？」

色んな人にバトルを吹っかける彼。私の隣にいる彼は驚きの表情だ。エーフィはその彼から離れてバトルフィールドに入りミジユマルに向かって走っていく。

「ハア……」

隣にいる彼は溜め息をつく。フィールド見る気配が見えない。

「あの、指示出さないのですか？」

不安になって彼に言うが、その彼はこっちを見て言ったのはこれだ。

「ああ、大丈夫。どーせすぐ終わるから」

どういうこと？ と疑問に思った私だけどすぐに向こうから悲鳴が聞こえてきた。何事だと思って向こうを見るとエーフィは涼しい顔をしてこっちを見て、ミジユマルは戦闘不能になって倒れていて、相手は両手を顔の横に当てて縦に大きく口を開けているではないか。いったいどういうこと！？

「ああ、また念力で遊んだな、あいつ」

隣から恐ろしいことが聞こえてきたけど気のせいよね、多分……。

「俺の名は酒井京介だ！ 覚えておけ！」

とか何とか言ってミジュマルをボールに戻してその場を去る彼。酒井君か、覚えておこう、一応。

「覚えておけ、と言われて覚えてるほうがすごいとおもっただよな。まず、僕は名前を訊いてないし」

うん、確かにそれは言える。この人は酒井君のことは覚えておかないだろうな、興味なさそうな雰囲気だし。

その彼もエーフィを持ち上げると座ったままこっちを向いてきた。

「そうだ。君、部活入ってる？」

「いえ」

私は彼の質問に首を横に振って答える。

「じゃあ、生徒会執行部に興味ない？」

突然のことで頭が真っ白になった私。何とか働かせて整理しようとするも無理。いきなりだからか、何も言えなかった。そして思わずこんなことを言ってしまった。

「……………はい？」

初バトル！ VS ミジユマル そして部活の勧誘！（後書き）

……ちょっと展開早かったですでしょうか？

全く怪しくない勧誘！（前書き）

頭の中が混乱している私。そしてこの勧誘、受けるべきかなあ？

全く怪しくない勧誘！

「……………はい？」

混乱する頭の中、私から出した言葉はそれだ。いや、だってね、普通の部活だったらこんなことにはならないでしょう。でも、生徒会執行部って、字の如く生徒会に大きく関わるじゃないですか！そんなところに私なんか……………。

「あゝ、興味ないなら別にいいんだよ？」

と、目の前にいる彼は苦笑しつつ言う。

「いえ、別にそういうわけじゃないんですよ！」

私は首を横に振りながら言う。言ってることは本当です。

「ただ、私みたいな人がそんな真面目な人がいっぱいのところにて大丈夫なのかな、と」

これは少し心配なこと。と思ったら彼はいきなり肩を震わせて笑っている。流石にこれはムツとするなあ……………。

「あゝ、私が何か変なこと言いました？」

私がそう言うと彼は笑つのを止めて立ち上がる。うう、可笑しかったのかなあ？

「いや、ごめん。可笑しかったわけじゃないからね？」

目を拭きながらそう言う彼。うん、あなたは人の心が読めるのですか？

「生徒会や執行部ってそういうイメージがやっぱり強いんだな、と思って。でも、安心して。こここの執行部はそんな固くないから」

そうなんだ、と思いながら彼の話を聞く私。うん、意外な答えが返ってきた。

「どっつ？」

首を傾げて訊いてくる彼。うん、そういうことなら！

「私、みてみます！」

と、力強く言った。すると、彼は顔に満面の笑みを浮かべた。正直言ってそれ、可愛いです。

「本当だね！？　じゃあ、今すぐ行くっ！！」

と言って私の腕を掴む彼……………て、え？

「ど、どちらへ！？」

「勿論部室！！」

さも当然のように言う彼。私は頭の中の整理がつかないまま、彼に引っ張られていった。そしてあなた、エーフィを頭に乘せて重くな

いんですか？

全く怪しくない勧誘！（後書き）

今回は少し短めにしました。本当はもっと長く出来たらいいんですけどね……………。

なんだろう、この感じは…（前書き）

タイトルを変更しました。そして、このお話を書くのはすごい久しぶりですね……………。

では、本編どうぞ！

なんだろう、この感じは…

私は龍也さんに連れられて執行部室に着いた。隣には生徒会室がある。あ、龍也さんと言うのは私をここに連れてきた人の名前です。彼は朝倉龍也^{あさくらりゅうお}。ここ、執行部の三年生なんです。にしてもこの部屋、広いなあ。

「あの、先輩！」

「ん？」

「他の人達はどうしてるんですか？」

私は気になった。何故この部屋には私達二人以外いないのか、というのを。部活なら他にいてもおかしくはないのに何故か部屋には誰もいないのだ。

「ああ。それは、先生に話を訊きに行ったか隣の生徒会室にいるかだからだね。何故そんなことになっているのかというと、隣のほうが広いし、仕事はしやすいから」

彼の話聞いて成る程、と私は思った。つまり、基本的にはこっちではなく隣で活動するのか。

「じゃあ、ちょっとこっち来て」

龍也さんは私に手招きして隣に座るように促す。私はそれに従うと何枚かの用紙を渡された。それは活動内容について書かれていた。

龍也さんはそれを簡単に説明していく。

「ところで、さっきから気になったんだけど、どうしてずっと僕の顔を見てるの？」

「ふえっ!？」

私は彼に指摘されてやっと気づく。言われてみればそうだ。彼が説明している間、私はずっと彼の顔を見ていた。何だか顔がすごい熱い。湯気が出そうな程熱い!

「と、特に意味はありません!」

私は慌てて顔を逸らしてしまった。彼はそう、とだけ言った。でも、なんだろう。よく分かんない、この感じ……。彼を見て何だか安心出来るのと同時に、彼が何故だか自分に似ているような気がしてならない。それに、このどっかで会ったことがある?

……分らない。全部、分らない。でもこの部活、いや、この人の近くにいたら何か分かるかも知れない。

……よし、決めた。

「先輩……」

「ん、なあに？」

私は一呼吸おき、そして、叫ぶようにこつ言った。

「私、ここに入部します!!!」

なんだろう、この感じは…（後書き）

何か急すぎるような気がする。展開を遅くするべきか、早くするべきか今迷っています……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3608u/>

平和を願う、ただそれだけ.....

2011年10月9日05時01分発行